



# 理工学部の変遷をたどる

今年2022年は理工学部が矢上キャンパスに移転してちょうど50年という節目の年。理工学部の前身である戦前の「藤原工業大学」の創設から慶應義塾大学「工学部」へ。さらに戦後の小金井キャンパスでの再出発と、日吉矢上台に“復帰”して現在の「理工学部」として改組されるまでの歩みを振り返る。

## 工学部設立の立役者は 小泉信三と藤原銀次郎

1933（昭和8）年に塾長に就任した小泉信三は「理工系学部設立」を重要な懸案事項としていた。実は福澤諭吉の在世当時より、文学部・経済学部・法学部・医学部に続く理工系学部の設置が慶應義塾の課題となっていたが、学部設立のためには莫大な費用が必要となり、資金調達が高い壁になっていた。

同じ頃、王子製紙株式会社社長・会長を務め「製紙王」と呼ばれた塾員の藤原銀次郎は、日本の発展のためには私財を投じてでも本格的な工業大学を設立することが必要だと決意を固めていた。同じ志を抱いた塾員同士が会談の機会を持ったのは

1938（昭和13）年のこと。6月に東京・銀座の交詢社で工業大学設立に関する初めての話し合いが行われ、その後二人は何度も協議を重ねる。その結果、小泉が学長として教育を、藤原が理事長として経営を担当することで合意し、藤原が私財800万円を投じて「藤原工業大学」を設立することが決定した。

1939（昭和14）年、日吉キャンパス内に理工学部の前身となる藤原工業大学（機械工学科、電気工学科、応用化学科、および予科）創設。小泉と藤原の協議の中で、将来の慶應義塾との合併を見据えて、制服や教員人事などは慶應義塾大学と同等または共通にするように配慮された。



理工学部校舎の変転（『慶應義塾大学理工学部75年史』より）

## 戦中・戦後の苦難と 「小金井」での再出発

太平洋戦争末期の1944（昭和19）年、創立前からの約束通り藤原工業大学は慶應義塾へ寄付されることが決まり、8月、正式に慶應義塾大学工学部が発足した。



藤原工業大学予科校舎（写真提供：福澤研究センター）

(右) 小金井キャンパス正門  
 (左) 小金井キャンパスでの研究風景  
 (写真提供：理工学メディアセンター)

しかし戦況はますます悪化。それに伴って同年2月には海軍軍令部第三部が日吉キャンパスの予科第一校舎（現高等学校校舎）を使用することになり、9月には連合艦隊司令部が日吉キャンパス内に移転してきた。翌1945年4月、空襲によって日吉キャンパスは施設のおよそ8割を焼失。8月に戦争が終結すると、

今度はアメリカ軍にキャンパスを接収され、工学部は学び舎を求めて東京・目黒の旧海軍技術研究所、川崎市溝ノ口の工場内の国有地などを転々とする事になる。終戦後の混乱期、これら仮校舎での授業に出席できたのは京浜地区在住で生活が安定した者だけだった。そのため出席できない者に大学の状況等を知らせる「工学部だより」の発行や、基礎科目の演習問題を郵送する通信教育も行っていた。

1949（昭和24）年、こうした不便を解消すべく、現在のJR武蔵小金井駅の南に位置する横河電機製作所の工場跡に「小金井キャンパス」を整備して移転。戦後の新制大学制度の

スタートとともに新天地での再出発となった。小金井移転の年は工学部創立10年という節目でもあり、記念式典の開催にあたっては、限られた予算の中で教職員と学生が協力し合い、机や椅子等も手作りしながら準備を進めた。運動場の整備では、当時の丹羽重光学部長が自らローラーを引くこともあったという。

以後23年間、小金井キャンパスは慶應義塾の工学部の拠点となった。この時代は日本が工業製品の輸出による貿易立国として高度経済成長を遂げた時期であった。政府による科学技術振興策も追い風になり、学部と大学院の定員増や施設・設備の拡充が進んだ。

## 日吉への復帰を果たし、工学部から「理工学部」へ

小金井キャンパスへの移転から10年を経た頃、工場施設を再利用した建物の老朽化や1年生が一般教養課程を学ぶ日吉から遠いことなどから日吉への復帰を望む声が次第に高まっていた。復帰が決定したのは1968（昭和43）年のこと。移転先の日吉矢上台は日吉キャンパスとは谷



竣工後の矢上キャンパス

を隔てて向かい合うロケーション。戦後、アメリカ軍のブルドーザーを借用して整地されていたため、

新キャンパス建設にはうってつけだった。工学部が小金井に移転していた間、この地は体育会野球部や自動車部の練習場として利用され、塾生からは「嵐が丘」と呼ばれていた。

1972（昭和47）年、ついに矢上キャンパスが開設され、工学部は念願の日吉復帰を果たした。9年後の1981（昭和56）年には、工学部から理工学部へ改組。以降、新学科が順次設置され、現在は11学科、理工学研究科3専攻の研究・教育体制となっている。2000年には「創造と想像の拠点」である矢上キャンパスのシンボルタワー「創想館」も完成し、2014年には創立75年を迎えた。基本理念「創発（emerging）」の下、理工学部の進化はこれからも続く。